

外山滋比古（とやましげひこ）氏が亡くなって、もう一月近く経つ。私は、ちょうど外山氏の著書を2冊読んでいたところだった。私の読書スタイルは“併読”なので、同時に5～6冊読み進めている中の2冊だった。

ご存じない方もおられるだろうから、外山氏の著書に載っている著者紹介を以下に記す。

1923年、愛知県生まれ。お茶の水女子大学名誉教授。東京文理科大学英文科卒業。雑誌『英語青年』編集、東京教育大学助教授、お茶の水女子大学教授、昭和女子大学教授を経て現在に至る。文学博士。英文学のみならず、思考、日本語論などさまざまな分野で創造的な仕事を続け、その存在は「知の巨人」と称される。著書は、およそ30年にわたりベストセラーとして読み継がれている『思考の整理学』をはじめ、『知的創造のヒント』『日本語の論理』など多数ある。『乱読のセレンディピティ』『新聞大学』『老いの整理学』は、多くの知の探究者に支持される。また、『乱読のセレンディピティ』の続編『乱談のセレンディピティ』は、ビジネスマンの耳目を集めている。

私が外山滋比古氏を知ったのは、高校時代である。高校の模擬試験の国語の問題に、外山氏の文章が出題されることがあった。あの頃の私は、模擬試験は嫌いだ、国語の問題、それも現代文の文章を読むのは好きだった。試験の問題になるくらいだから、良質の文章ばかりだったと思う。私は、国語の試験中に読書をしていたようなものである。国語の授業というよりは、模擬試験を通して、小説などの文学ではない「評論」というジャンルの文章を知り、興味をもったように記憶している。

『思考の整理学』は、若い頃に一度読んだ。それなりにおもしろくためにもなった。思い立って数年前に、もう一度読んでみた。すこぶるおもしろかった。私の理解度、納得度が上がっていた。さすがは「知の巨人」である。外山氏の著作は、上記以外にも数多くある。そのうちの何冊かを読んだが、毎回何かしらの刺激がある。そして納得させられる、腑に落ちることが多い。

知の巨人、外山氏が鬼籍に入ったということは、氏の新たな著作は世に出ないということである。これはマイナスである。だが、氏が今まで心血を注いできた膨大な著作の数々は残る。これからも人々に読み継がれていく。

『乱読のセレンディピティ』を読んだ。私は自分の読書スタイルを“併読”と読んでいたが、これは外山氏のいう“乱読”に近いものだとして理解した。何か背中を押していただいたようで心強い限りである。昔は、1冊の本をまじめに最初から最後まで読み通すことが読書だと思っていた。しかし、いつの頃からか併読のスタイルになっていった。外山氏のおかげで、自分がやっていることもあながち間違いではないと思えるようになった。

高校時代に外山氏に出会ったこと、外山氏の文章に出会ったことが大きい。高校時代を思い出すと、他にも亀井勝一郎氏の文章もよかった。『愛の無常について』『青春をどう生きるか』『大和古寺風物誌』などが思い出される。やはり高校時代、若いときの読書は大事である。目には見えないが、自分というものを形作るのに何かしらの影響を与えているように思う。大切なものほど、目には見えない。

先日、私の娘が「何か本を読まなくちゃ」といっていた。娘の机の上に、だまって外山滋比古氏の『思考の整理学』と太宰治の『人間失格』をあげておいた。

外山滋比古氏の数々の業績に敬意を表すとともに、著作を通して多くのことをご教授いただいたことに感謝したい。これからも氏の著作から学んでいける自分を幸せに思う。